第二支部二一七収容所）
昭和二十四年十一月一日　舞鶴上陸（信濃丸）
昭和二十四年十二月　熊本鉄道局に復職
昭和五十五年四月　定年退職
昭和五十五年四月　三軌建設南九州支店入社
昭和六十年八月　第三セクター南阿蘇鉄道入社
昭和六十二年九月　右退社、現在に至っておられる。
平成六年七月二十五日には、シベリアの抑留記録誌「シベリア二一七捕虜収容所」を発刊されました。

（埼玉県　山口　秀夫）

私の青春はシベリア抑留

福井県　天谷　小之吉

一、昭和二十年八月二十日

十九日の昼過ぎまで両方共に撃ち続けたが、それ以後は、日本側もソ連側も弾を撃たない静かな、まるで気の抜けたような戦闘状態と変わった。そしてそのころ、こんなうわさが流れていた。「敵のスパイによる宣伝に騙されるな」と注意が出た。「日本軍は戦争に負けて降参したのだ、この陣地だけが戦っている、ほかのところは武器を捨て内地へ帰る準備中だ」、しかし、事実こういう使者が何人も来たそうだが、敵のデマとして全部撃ち殺したらしい。後方から来る通信（無線）も、敵の謀略として一つも取り上げなかったらしい。そのため、北鎮台陣地はほかの陣地や部隊より数日遅れてしまった。そしていつごろだったか、白旗を持ったソ連軍人と日本軍人と、そして通訳らしい三人が、孫呉方面より決死隊となって我が陣内の軍用通路を北上してきた。

北鎮台陣地の最高司令官浜田十之助閣下に交渉に行くんだと悲壮な顔色だった。それもそのはず、今までの使者は一人も戻って来なかった。途中で皆射殺されていた。このことを承知の決死隊、実に立派な者だった。もしこの方々が来てくれなかったら、戦争はまだまだ続いていただろう。そして、犠牲者ももっと沢山出たことと思う。この方たちの勇気ある行動、そして

浜田閣下の適切なる判断によって、北鎮台陣地六千名の命が長らえた。

二、終　戦

今日も昨日同様、弾丸の音もなき休戦状態のような静かな日であった。戦争中なのに何の命令もなく、我々兵はただ兵器の手入れをしていた。午後何時ごろだったか、はっきり記憶はないが、遠い北東のソ連の集結地と思われる上空と北鎮台本部上の両地点に、同時に大きな白旗が立てられた。これを見た我が友軍たちは、両方同時に白旗を上げたのだから、停戦協定が成立したのだ。また一方では、内地の情勢を知らない私たちは、ただ北鎮台陣地のみが有利で、ソ連側は相当やられたから、負けたと言わずに停戦と出たか、利口なやつだ…。

長い戦争もやっと終わった。内地へ帰れるぞ。我々は戦争が続く限り、まるで無期懲役者同様、除隊もなければ、内地へ帰れるような甘い夢は望めなかった。そして、今度の日ソ開戦によって、死刑の宣告を受けた罪人同様、明日の命を知らない私たちだった。この戦いで毎日何十人、否、多い日は何百人がその犠牲となって血みどろの姿で助けを叫びつつ死していく。今日は命があったが明日の我が身の生命の保証はだれもできない毎日だった。今、目前に白い旗を見たときは、停戦本当だろうか、半信半疑。その後、我が陣地にもA班長が、上官の命令と言って新しい白地の敷布を一番高い白樺の木上に吊した。このとき初めて停戦という実感がわいてきた。やれ死なずに済んだ。あのときの喜びは飛び上がりたいほど、体の置きどころのない、まるで宙に浮いたような気持ちだった。

しかし、その反面、入隊以来生死苦楽を共にしてきた今は亡き戦友のことを思えば、独り喜びはできなかった。親兄弟以上に接した先輩後輩、そして同年兵たち、平時においての訓練ではいつも空砲射撃だったため、何回実戦的模擬戦をしても最終の点呼には皆顔を揃えて食事をしたが、日ソ戦になってどうだろう。あらゆる兵器を使って実弾射撃だ。その度ごとに戦死傷者が出る。そして、多くの友が亡くなっていく。そして玉砕した中隊も既に出ている。今日もよくぞ命があ

ったなぁと思う毎日だった。下級兵は小さな声で、よかった、よかったと手を取り合って喜んでいた。そして微かな微笑も隠し切れなかった。しかし、A班長は本当に跳び上がって喜んだ。これが本当だろうと思う。

さて、瑷琿史P二一七にこんなことが書いてあった。陣地の地下壕では軍人軍属の婦女子が収容されている。この人たちはそれぞれイザという時のために手榴弾を各人一個ずつ渡されていた。夜も更けたころ代表らしい婦人が三人司令部に来られた。そして、私たちは平時には大和撫子、この覚悟をもって見苦しくないように手榴弾で立派な最期を遂げる心算でしたが、一日一日と日がたつにつれ、また、無邪気な子供の顔を見るにつけ、どうしても殺す気になりません。「どうか貴方がたの手で知らぬ間に殺してください……」この言葉を聞いて、一瞬どきっとしたが、よろしい、お互いに皆命はないものと覚悟はしています。我々にお任せください。その後、だれにも気づかれない間に、婦女子たちの部屋の下に爆弾が仕掛けられ、最後のときは爆破するよう、万全の準備はできていた。

三、炭坑作業

十一月にもなるともう表土は凍結する。機械でも採土できなくなる。すると今度は爆破作業が行われる。直径五センチメートルほどで、長さ百五十センチメートルの鉄棒の一方を、鉛筆の芯のごとく尖らして、それを石炭の火で熱し、真っ赤になるまで燃やして、赤く火の粉の吹く鉄芯を土面にハンマーで打ち込むのである。最初簡単に思ったが、やってみると大変で、そう簡単にはいかなかった。表面より三十センチメートル下は案外楽だったが、そこまでの上層部が堅い。まるで鋼鉄のようだ。一度焼いて打ち込んでも、わずか一センチメートルくらいしか入らず、人が代わり、その都度焼き鉄芯を換えても思うように進まず、肩があがってしまう思いだった。また、手にはマメができて痛くて、もうハンマーなんか持てないぞと訴える者もいた。

しかし、この作業は一日じゅう石炭を燃やすことができた。それが何よりの楽しみだった。午後三時を過ぎるとソ連兵の火薬係が来て、完成した穴の中にダイ

ナマイトを差し込んでいく。そのころ、我々作業者は火を消して作業器具を全部一カ所に集め、三百メートルほど離れたところまで移動（避難）して次の指示まで待機するのであった。

ピリ、ピリ、ピリという笛の音と共に導火線に火をつけ回る。こちらから見ていると面白いように見える。しかし火付け役は汗を流して走りまくっている。最後の一つをつけ終わると、両手を高く振りながら避難場所へ急いで駆け込む。と同時に、大爆発音と共に大小さまざまな土が飛び上がる。まるで打ち上げ花火のようだ。大きいバケツくらいのはわずか一メートルくらいしか飛ばないが、一握りくらいのものなら五十メートルくらい軽く飛び上がり、四方八方に散る。二百余個の爆破は二十分くらい続いた。その間、私たちは茫然として見ているだけだった。

不発弾が残っていると危険なため、その日の作業は終了となり、翌日ソ連兵の現場監督が異常の有無を確認して、作業を受けつけた。

四、食堂と食事

主食である雑穀が品不足のときでした。当時一日分の雑穀の半分ほどが、数の子（鰊）の乾燥したものを代替品として支給されたことがある。初めのうちは珍しさもあって、水で戻して食べたが、毎日となると飽きてしまって、後には手製で袋をつくって、その中に入れ枕にしたことを思い出す。ソ連人は数の子やこんぶなどは食べなかったように思う。

この食堂に私が勤務したころの糧秣について少し述べてみる。入荷してくる主食は主に大豆、高粱、燕麦、玉蜀黍などで、副食としては、まず魚類は鱒、鮭、鰊、鰯などで、季節によっては黒竜江でとれた川魚なども時々配給された。肉類としては、牛や馬そして野羊などだった。しかし時折、桶樽に牛の舌ばかり、又は面白いことに雌牛の生殖器が幾樽も入荷した。しかし、雄牛の睾丸は入荷したが、陰茎は一個も入荷しなかった。話によると、あの部分を加工して杖にするらしい。それからまた、こんな物が入荷した。牛の首から上の顔面部の皮を剥ぎ取った、左右に大きな角の付いたいわゆる生首が樽の中に入っていた。初め蓋をあけた者

は吃驚仰天、話を聞いて駆けつけた者もやっぱり驚いている。睨んだままの目玉、また片方の目玉が落ちているもの、さまざまだが、余り気味のよいものではなかった。

調理としては、釜の上に三つまたを組み、縄を吊し、牛の角に結んでそのまま釜の中に入れて炊き込み、スープの味出しにした。

調理師はこれが仕事で、驚いてばかりはおられない。三つまたの横にどっしり腰を落として、時折、生首を上げては、表面の柔らかくなった肉をフォークで突き落としてはまた釜の中に入れて煮込む。何回も何回も繰り返していた。高い釜台に三首揃って吊された光景は、だれが見ても思わずどきっとした。また、この姿を見ない一般作業者は、今日のスープはとてもおいしいと喜んでいた。その反面、この光景を見た者は喉に通りにくかった。

五、蠅退治

昭和二十二年の夏、ライチハ第二食堂で蠅退治が行われた。毎食事、容器に盛った食事の上が真っ黒と言っても過言ではないほど蠅が集まっている。また、煮汁の中にも必ず数匹の死蠅が入っていた。最初は気味が悪く箸で一々出していたが、蠅の死骸は出せても、汁は一滴といえども捨てられない。今の我々には栄養補給のために贅沢は言えない。否、贅沢ではない、衛生上許されることではないが、しかし、こんな環境でも生きるためには仕方なく丸飲みしたものだ。

七月のある夜、食堂係長の川口さんが、蠅退治をやってみようと、食堂勤務者三十人を集め、まず食堂内の全部の電灯を消して、配膳室の電灯のみつけて、その明かりの前窓に米袋を広げて中に入るように仕掛けて、白布（テーブル掛け）を上下に振って追い込む作戦。蠅の習性として、夜は高い天井裏に集まっている。白布を振って追うたびごとに、ぶんぶんと明かりの方に集結する。その鳴き声が（飛ぶときの羽の音だろうか）騒がしい。いかにたくさんいたか分かるでしょう。

配膳室の食堂側二カ所の高窓付近は、押しかけた蠅で真っ黒。白布で追われるたびに先頭から袋の中になだれ込む。第一回目、まず成功だった。二カ所の袋合

わせて約三斗くらいは入っただろう。食堂の電灯をつけて天井を見ると、先ほどまで真っ黒だったのが明るいほど白く見えるが、まだまだ所々に黒く点々と地図のように残って見える。一服してもう一度追うことにした。二回目は要領も習得したので案外簡単にできた。二回合わせてなんと五斗余りも袋に入った。だれしもこんなに沢山捕獲できるとは想像もしていなかった。

翌朝からの食堂は大変美しく、また久しぶりに蠅の少ない食事を口にすることができた。

六、厠

収容所へ入って一番先に驚いたことはまず便所でした。共同便所でした。個人個人の仕切りがないのです。便所の中央に約一・五メートルほどの通路があって、その両側が大便所となっている。縦に二十余りが一列に並べられてある。左右合わせて四十人ほどが中通路に向かって用を足す。まことに見事な風景である。朝のラッシュ時には入口に何十人も列をつくって待っている。中は満員である。順番がきて中へ入ると一目瞭然、四十人全員がお気張りの真っ最中である。急ぐ者は早く終わりそうな人の前に進み行く。最初は何だか嫌な感じだったが、ここ以外に場所がないから仕方なく待っている。用便中煙草を吸いながら、横の人又は前の人と話をしながら、「共産主義って困ったもんだなぁ、便所まで共同ではのう」と。

この国では、ちり紙がなくて大変困った。各作業へ行く道中又は作業場において、紙らしいものを見つけると、皆我先にと走って集めたものだ。強い紙のときは揉んで柔らかくするが、両手で揉むと紙に亀裂ができるので、用便中に片手で静かに揉む。特に火薬の入った内側の包装紙は半透明だが強かったので、このようにして使ったことを覚えている。私も丸三年シベリア生活をしたが、一度もちり紙の配給を受けた覚えはない。皆いろいろと工面した。特に下痢便のときは身を切るような思いだった。

七、懐かしのメロディー

今なお忘れられない思い出の一つ、それは第二分所に分かれて、私がたしか食堂管理助手兼被服係を担当していたときでした。第二分所の一洞窟に営内勤務者

ばかりが収容されていた。

この洞窟には、三交代、二交代、又は一昼夜交代の者ばかりで、いつでもだれかは仮眠していた。特に炊事勤務者は二十四時間の勤務で下番するから、二十四時間の休養だった。

下番した日の午前中はもちろん、夕方ごろまではまるで死人のようにぐっすり休んで疲労の回復である。私も自由な午後の一時を、この洞窟へ午睡に来てぐっすり寝込んだ最中だった。

（雨　雨　降れ降れ　母さんが
蛇の目で　お迎え　嬉しいな
ぴっち　ぴっち　ちゃっぷ　ちゃっぷ
らん　らん　らん）

その当時の蓄音機でこの懐かしい日本の童歌を歌っている。一体どうなっているのだろう、どこでどうして手に入れて……。皆茫然としている。中には、目に涙さえ浮かべる者もいた。

そうだ、あの人は内地を出発するときたしか二歳の女の子がいると聞いた。突然この歌を聞いて、内地の子供に会いたい気持ちを一層煽り立てたのだろう。また、洞窟内では一人の雑談者もなく、ただ無心にこの歌に感動して聞き惚れていた。

人間として、畜生に劣るほど惨めな環境や生活の中において、私たち日本人にとって親子の集い、また心の慰めとして、幼児が歌うこの歌を聞いた途端、どれほど感動し、どれほど胸を打たれたことだろう。長い抑留中に沢山の思い出はあったが、このときほど内地が恋しく、そして故郷が懐かしく思わせられたことはなかった。

この蓄音機を運んで聞かせてくれた当時無名の方に、最大の敬意と感謝の念を捧げます。

八、ビラカン伐採作業

ビラカンの冬の朝、明るくなる夜明けは午前八時半から九時ごろであった。表門に整列する七時ごろはまだ真っ暗だったので、いつも電灯がついていた。

カンボーイのドラスチー（歩哨のおはよう）朝のあいさつから、次はアジン、ドヴァ、トリ、チテリ（一、二、三、四）と数えて門より出て左折、そして西の方

へ進んだ。この門を出るとき、互いに手を取って、民主の歌声高らかに出発するのであった。距離にして四百メートルくらいのところに鋸の目立て小屋があって、この小屋の中で二人、日本人同士が夜勤で目立て作業をしていた。私たちは毎朝この小屋に寄って、目立てたばかりの二人用鋸とタポール（斧）を受け取って背負い、西の方へ西の方へと進む。「マタボーズ」木材運搬の専用レールが敷いてあった。その上を互いに肩を組んで、歌を歌いながら歩んだ。出発点からおよそ四キロメートルほどの地点で、樹木の伐採した跡が見える。近くの方から伐採したのだろう、後になればなるほどだんだんと奥地に進んでいく。

この作業のノルマは、立木を伐採して、二メートル五十センチに切って、その木材を今度は幅二メートル五十センチ、そして高さ一メートル五十センチの一山を二人でつくって百％であった。樹木の種類やまた場所によってその日の作業能率が大きく異なるので、その伐採地近くになると、我先にと走ってよい場所を陣取る。歩哨は我々の行動や作業範囲を自由に認めていた。そして、大体その作業範囲の中心地に薪を集めて、たき火をして暖をとっていた。

我々はまず防寒外套や上着を脱いで軽装となり、二人互いに呼吸を合わせて作業にかかる。最初に目算でどこまで、また何本くらい切り倒すか決めてかかる。できるだけ下枝の少ない、そして高い間のある木、運搬の楽な条件の揃ったところを選ぶ。直径三十センチ乃至四十センチほどの木の下に半中座して、二人曳きの鋸で、押す挽くの手順に合わせて一、二、一、二の掛け声を掛けて数分で一本切り倒す。凄まじい音と共に（ばり、ばり、どしゃん）横倒す。やれ一本やったぞと次々切り倒し、予定だけ倒すと、今度は下枝をタポール（斧）でつり落とす。それが終わると次は長さ二・五メートルに輪切りにして、大体の数を読んでみる。これで八分通りの仕事ができたとの心算で、今度は薪を集めて飯盒炊さんの準備をする。要するに、午前中に大半の仕事をして、それから昼食をする習わしにしていた。薪は前年かそれ以前に枯れた立木などである。シベリアの冬期間は枯れた立木などはほとんど

水分がないほど乾燥しているので、非常に燃え易い。

さて、雑炊の材料としては、粟か高粱で、その味出しに鱒か鮭又は鰯が一人分百五十グラム前後、肉の場合は三十～五十グラムだった。主食の黒パンは三百五十グラム支給された。

山の中での昼食はとても楽しかった。薪で暖をとり、熱いスープを啜りつつ、黒パンをかじっての腹拵えだった。この一時に互いに過去を語り、将来の空想を語るのは最高の楽しみだった。

朝作業に出るときは零下二〇度以下だが、山林の中での伐採は思ったより暖かい。作業中に汗をかくときもあって風邪を引きやすいので、作業前に薄着になって、軽い準備運動をしてからかかる。さて、昼食と休憩が終わると、ぽつぽつ積み荷にかかる。手ごろな末木を囲い木として、午前中に輪切りにした二メートル五十センチの木を積む。株太と末口と交互に積み重ね、天辺(てっぺん)が平均になるようにする。午後三時半ごろには積み終わり、それから四時半ごろまでたき火をして、皆の終わるのを待っている。

ノルマは毎日十分あった。余り張り切って仕事を沢山すると次の日からまたノルマが高くなるから、その日その日によって仕事を加減して、一二〇～一三〇％止まりとするよう心掛けた。

冬の日は短く、午後四時ごろで薄暗くなる。そのころ「おーい、もう帰るぞ」と大きな声で互いに呼び合っている。歩哨も「ソルダート、ダモイ」兵隊帰るぞと呼んでいる。すると、たき火を消して道具を背負って集合する。歩哨が来て人員の掌握をする。ハラショー、ダワイ（よろしい、行きなさい）すると、元気よく労働歌を歌いつつ収容所へ戻るのである。

民衆の旗赤旗は　我らの頭上になびく
高く立て赤旗を　その陰にせいしせん
労働者農民は　共産党を守る

この地方で伐採する木類は、杉、松、樅などでした。何しろ間(けん)数が長いので、思ったより作業能率が上がる。私たちの伐採した木材は、ほどんど薪にするので、直径四十センチくらいまでのを伐採するよう指示されていた。

最初に山に入った先輩の話によれば、松の木を伐採した際に、松の種「シイシカ」、その松笠の大きさはスーパーなどに陳列されているパイナップルくらいで、その中にある種は一個で約一合余り（二百cc）もあったとの話。

この種を蒸して乾燥させるととても香ばしく、食べると空腹の足しにもなったという。歩哨はいつもポケットから出して絶えず食っていた。口の中で実と皮を分けて、まるで鳥が食べるのと同様に。

さて、二人肩を組んで歩くと、ちょうど二人の足はレールの上を歩く間隔に合って都合がよかった。目立て小屋に着くころはもう真っ暗であった。背負ってきた道具を小屋の隅に置いて、目立て屋さんはまだ来てないが、皆面々に、目立て屋さん、お願いしますと言って小屋を出た。ここからはまるで我が家に帰るような気持ちだった。さて楽しい夕食が終わると、待っているのは民主運動でした。消灯までの二時間、朝は朝食までの一時間はみっちりと自主的に行わされた。この収容所の主力は特務機関の集団であるが故に、我らに至るまで、その偽装のために徹底させられた。

九、舞鶴入港

一分でもまた一秒でも早く日本の土を踏みたいと思う心は、この遠州丸に乗船している同胞は皆同じであろうと私は思った。

十二日朝、遥か東方に、小さな小島が見えるぞ、甲板上で叫ぶ声がした。その声を聞いて、だれが誘うともなしに我も我もと甲板に出て、その指差す方をじっと眺めている。海面上に少しずつ見える、日本列島独特の面影。緑の樹木に包まれた、まるで絵はがきのような光景である。

内地を出てから片時も忘れたことのない、懐かしい祖国の島々を今目前にしたとき、それは感涙むせぶ思いだった。五年ぶり、七年ぶり、中には十年ぶりという者もいた。嬉し涙で頬を濡らしている者や、肩を叩きあって喜んでいる者などさまざまであった。船が進むにつれてその島が右側に又は左側に代わって見える。いよいよ舞鶴港内に入ってきたんだなあと思った。はっきりと見える島の木立ち、松の枝や小島に寄せる白

い波の華、あの美しい箱庭のような、そして自然の風景は最高に奇麗だ。かなたの島にもぽつん、こなたの島にもぽつんと草葺き屋根の家が遠くに近くに見える。ああ、本当だぁ、日本の国だ、日の丸の旗が立っている、ここは舞鶴港だ、間違いない。待ちに待った祖国だ。今やっと帰れたんだと思ったとき、感慨無量、胸が堅く締めつけられるような、そして言葉も出ない。急に目頭が熱くなってきて目が次第に潤んでくる。この感慨は、私たち生ある限り忘却することはないであろう。

船より降りて桟橋を一歩一歩歩む。すると向こう側に、白いエプロン姿で、片手に日の丸の旗を持った近隣の婦人会の方々が、「長い間、本当にご苦労様でした」と深々と頭を下げてお迎えに出てくれた。この姿を見て、本当に嬉しかった。久しぶりに接する日本女性、何となく懐かしい、優しく、柔らかい感じがした。

引揚援護局の指揮者の指示に従って検疫や、身の回りの品から全身ＤＤＴを自動式散布器で噴き掛けられ、次に何年ぶりかの思いで、一度に何百人も入れる豪華さ、広々とした大浴場にて身も心も休められた。それから衣類の受領や復員調査などがあった。最後に復員者の手当として一人九百円が支給された。

相場の変動も知らない引揚者にとっては、まるで浦島太郎のようなものだった。終戦前の相場は上等兵で月十八円、兵長で月二十円、そしてそのころ、煙草二十本入一箱二十銭、甘味品として支給されたアンパン一個が十銭だった。このような相場しか知らないから、ここでもらった九百円は過分にと思ったが、その思いも束の間だった。商売上手な商人がここに入り込んで、このもらった銭を巻き上げようとしていた。「引揚者の皆さん、地方は物資不足で困っています。お金を出しても手に入りません」、言葉巧みにノートや鉛筆を売っている。私たちもその言葉を信用して買った。私はノート三冊と鉛筆五本を買って百円札を出して、釣り銭をくれるのを待っていた。ところが、釣り銭どころか、まだ足りないと聞いて驚いた。

その当時の相場は、大工さんの日当が二百円、一般職人が日当百五十円と後で知ったが、私たち、戦後ソ

連へ強制抑留させられ、まず酷寒時、銃に追われての重労働、水があっても飲めない炎熱下の過労、南京虫、蚤、虱、外敵による不眠不休の生活、いつも腹を満たすことのできない空腹感、青春時代のあらゆる欲望との戦い、この三カ年の代償が、大工さんの四日半、そして一般職人の六日分の日当と同額でした。余りにも切ない限り。

十、帰　宅

思えば、戦争たけなわの昭和十九年二月、万歳、万歳と歓呼の声に送られて、このホーム「福武線鳥羽中駅」がいっぱいになった、あのときの面影。敗戦という惨めさ。極東守備の関東軍中、私たちの陣地は勝ち誇っていたが、停戦による武装解除。直ちに(赤の国)ソ連に拉致され、衣食住の不備、酷寒中の奴隷生活、多くの犠牲者が出たことは周知のとおり。特に聞き取り調査にて証明されたことと思います。ですから、ここでは省略する。

私の場合は、赤の国から帰ってきたというので、親戚縁者以外は一人も迎えに来てくれませんでした。鳥羽中の駅に降りた途端、人影のない余りの淋しさに堪え切れず、涙が滲み出た。

出征のあのとき、八幡神社の境内で、村中の歓送会の席上で、当時の区長さんが、留守中のことは心配せず、立派にご奉公してください、出征家族は私たちでお守りしますと、あの立派な言葉は一体何だったのだろう。余りにも想像に反していたが、戦争に負けたんだ、仕方がないと諦めた。鯖江三六連隊の膝元で育った住民たち、「赤」と聞いただけで二重、三重に警戒する憲兵隊が近くにあったから。

家に帰って、一週間に一度は必ず村駐在所の若い警察が来て「長いことご苦労さまでした。お体は大丈夫ですか」、あるときは「変わったニュースはないですか、あったら知らせてください。いつでも飛んで来ます」、そして十月中ごろだった。その警察が来て「明日福井のＣＩＣへ出頭してほしい」と言ってきた、訳も言わずに。私も何の気にもせずに出頭時間に応えた。

(中略)

今言葉や筆では表現できないが、ただ生地獄から解

放され、生きて帰国できた。その喜びだけで日々を送り、二度と再び戦争だけは起こしてはならない。陰に沢山の犠牲者が出たことを考えなければならない。

【執筆者の紹介】

天谷氏には全抑協福井県連事務局を担当してもらっています。

私が昭和五十五年六月、シベリア抑留者武生市支部を結成した翌日、天谷氏より「新聞を見ました。武生支部の結成おめでとうございます。支部長さん、よろしく私たちの方へもお口添えを願います」とあった。

私は翌日、早速天谷氏宅へ行きました。すると、鯖江市の田中氏（後に鯖江支部長）と今立町の川上氏（後に今立支部副支部長）たちがいて、県内各市町村ごとの組織づくりの最中でした。ここで今日までの粗筋を説明してもらいました。

今年二月十七日、全国瑷琿会福井県支部の戦友会の席上、相沢会より三人のお方が来られて、相沢会組織に関する説明と入会依頼がありましたので、福井県も組織をつくろうとのことでした。

そしてついに昭和五十六年六月七日、全抑協福井県連支部が誕生いたしました。当日は全抑協東京本部より二名の方が出席してくれました。

天谷氏の兄さんが昭和十三年十月、北支において戦死されているので、天谷氏の抑留三カ年を待つ両親の気持ちを察するに余りあるも、天谷氏本人も、あの酷寒の中での重労働や、特に厳しかったあの地域での民主運動にもめげることなく生還でき、この全抑協組織運動にも福井県のリーダーシップとして活躍してくれています。

（福井県　山口　速雄）